

一兵士の終戦

田川郡赤村

鶴田 澄男

昭和20年7月末、8中隊の中からY軍曹に引率されて10名ばかり、静岡県磐田町の駅へと向う。全員九州出身者。行く先は九州宮崎県の日向住吉。私の部隊は第1航空情報連隊教育隊で、日向住吉に第2連隊ができるはずであったが、戦局の逼迫で中止になり、8月1日入隊の初年兵を受け入れて、福岡の第6航空軍へ編入させるための出張である。全員九州出身者を選んだのは任務終了後各自の故郷で数日間の暇をとらせるという含みである。私を含む5名ほどが最下級の一等兵だが、九州出身ばかりの旅となれば階級と言うより兄弟という感じで打ち解けて、行進の軍歌に「勘太郎月夜」が出たりする。

第一の下車は大阪駅である。握り飯の昼食1包みつつを貰って駅前の植込みの石に並んで腰掛ける。同じ中隊のH准尉と連隊本部の将校も加わり15名ぐらいになっている。

5才ぐらいの孤児が私の前に立った。握り飯を1つ与える。他の人も与えたので5つぐらいを抱えて去った。100mぐらい向こうに母親らしいのが道端に腰掛けている。握り飯を渡すとまた私共の方へ来て立った。今度は少尉が「ここで食べる」と命令して1個渡す。またたくまに食べたのでまた渡す。3個食べた。

食事を終えて辺りを歩く。防空壕をふとのぞく。女の人の死屍が足をこちらに向けて転がっている。駅の出入口なので大変な雑踏なのだが、死体にも馴れきって誰も振り向かないし、始末もしない。歩いていた黒い詰め襟の青年が、ゆっくりとその場に坐った。そして長々と人々の足元に伸びた。誰一人関心を示そうともしないのが私には強烈な印象であった。

都城に程近い日向住吉は田園地帯である。校舎の跡のような兵舎で新入兵の受け入れを待つ数日間に、ロッキードP38の掃射が1度あったが被害なし。受け入れを終って博多駅前のお寺で引渡し終了。各自故郷に向う。田川市の吾が家は私の入隊後強制疎開で京都郡犀川町高屋の谷間の父方の叔母の家の稲屋に住んでいた。でっぴりしていた母が猿のように痩せて、見る影もないのはその生活を察せられたが、このような苦しみは当時一般的なことであった。入隊する時、母に挨拶したのに、神棚の前に正座したまま振り返らなかった母には、振り返って別れを言えばこれが本当になると言う思いがあったのかも知れない。

職場を訪ねたり友達に会ったり、3日程の休暇はたちまち終わった。

7日の晩、上りの列車を待って小倉駅の待合室の人混みにいた。私達の一かたまりの中に6才ぐらいの戦災孤児が1人いてみんなにいろいろ訊かれていた。どうも食事をしていないらしい。車中で食べるようにと、母がなけなしの白米で握ってくれた握り飯が、雑のうの中にあっただのでつい手渡した。視線が私に集ったのを感じたとたん、顔が熱くなって、いたたまれずにその場を離れて別の所に坐った。気を静めていると老人夫婦が私のそばに来て「私たちも何かあげたかったけれど、お米しか持っていなかったの、あんたが御飯をやってくれたのをみて

ほっとしました。これを代りに貰って下さい」と1升ばかりの米を無理やり私にくれて去った。こんなとき変なようだが、差引きもうかったなと思った。

広島原爆を見てきたような話ぶりで聞かせている関西弁の男がいて、そこにも人だかりがしていた。後でわかったが、それが本当ならその男は無事ではない筈であった。

その広島には8日の昼頃着いた。手前の横川駅で下車、広島駅までは線路が曲っていて不通とのこと、30人ぐらいで線路伝いに日射しの中を歩く。駅の手前から右に折れて小道を歩く。丘の上に墓石群がある。墓の1基に黒焦げの死体がすがりついている。生きたまま一瞬のうちに焦げて、そのまま墓にすがつたのであろうか。黒焦げの人間が動いていることを私には想像出来ないが事実である。墓地から見渡す広島は海まで見えて、立っているのは墓ばかり。墓地以外はのっぺらぼうに瓦礫である。

左に折れて橋を渡る。橋の中央に馬車と馬と馬方とが一塊の黒焦げのまま放置されている。真昼の日射しがかえって無残であるが、もう人間の感情の働く世界ではない。橋を渡って左に折れるとすぐに駅である。水道の蛇口がこわれて水が出放しになっているのを手で掬って飲む。白い布に水を含ませて持って行く人がいて、わずかな日蔭で戸板のようなものに人が横たわっている。布ぎれの水を含めると、ピンク色の口が僅かに動く。生きている人間とはとても見えないが、焼け跡から探し出して連れて帰ろうとする肉親の思いは如何ばかりかと後で思う。その時は不思議なほど一風景としか見えない。駅の焼け残った石壁に新聞社の白い大きなビラに墨で黒々と「戦い抜こう」と書かれているのが空々しい。プラットホームに入ると反対側に焼け残ったような感じの兵隊20人程が立ったり、うずくまったりしているがもはや軍隊という面影はない。広島駅を離れて東へ発ち約10分間ほどは、あたりの松林は頭の方が皆焦げたような枯れ色であった。

帰隊して8月11日、連隊本部に行ってきた大阪人の兵長が「日本が負けたで一」と大声で言っていた。誰も予期していたことなのでやっぱりと思った。

戦死者名簿を除く重要書類の焼却が始まった。何千枚もある陸地測量部の5万分の1地図は良質の紙で、こんなものまで焼くのかと惜しい気がした。15日終戦。

演習もなく無為の数日が過ぎた17日夜、基幹兵集合があり昂奮した口調の兵長が、上陸する米兵と、及ばずながら一戦を交えようと叫び、皆が同調した。大変なことになったが仕方ないなあきらめた。

班に帰って、8月1日に入隊したばかりの初年兵を集めて事の次第を説明し、「これはもう天皇の命令ではないので死ねば犬死になる。帰りたい者は今のうちに帰るが良い」と、今思えばとんでもないことを言ったものである。18日午後2時頃「不時点呼」が呼集された。人員点呼により私の班が5名不足していた。准尉の説明によると、午前10時頃兵舎の裏の方の道路を5人の兵隊が車力に荷物を積み、体の弱そうな1人を乗せて4人で引張って町の方へ行くのを村人が見たと言う。解散後、直ちに基幹兵、班長、中隊幹部が捜索に出た。私も班長と2人で出発、途中で「実は……」と班長に告白した。「君が言ったのか」と軍隊には珍しい言葉

である。乙幹のインテリ班長は「実は俺も5人の兵隊に、どうもお世話になりましたと挨拶されて、返す言葉がなかった」と言う。私はインテリ班長で良かったと胸を撫で下ろした。

とにかく一刻も早く見付けて5人を匿さねばとまず駅に急いだら、上りも下りも発車したあと、無事に帰ったであろうと安心した。

翌日午前9時の点呼で「今から名を言う者は1時間以内に隊を立ち去るように」と90名ばかりが名を呼ばれ、私はたしか3人目ぐらいであった。